

覚信尼公と大谷廟堂

宮 崎 円 遵

覚信尼公と大谷廟堂という題がありますが、これについては御承知の方も多いことと思いますので、わたくしの所見を簡単に申し上げたいと思います。親鸞聖人がなくなれますと、東山の鳥辺野で火葬をいたし、御遺骨を大谷に納めてお墓を造りました。その場所は、現在のどの辺に当るか、正確にはわかりませんが、古い『絵伝』の図で見ますと、一基の笠塔婆をたて、これは石の塔でありますが、その周囲に柵をめぐらした程度のものであります。ところが、それから十年たちました文永九年に、覚信尼公が住んでいました屋敷の中へ御遺骨と石塔とを移し、また廟堂を造りました。その場所は現在の知恩院の山門の北、崇泰院の裏庭の地であるといわれていました、一般に元大谷と呼ばれています。もともと聖人のお弟子は関東に沢山いまして、上京の際はよくお墓へお参りしたことを思われます。しかし鳥辺野のあたりはいわば一般人の共同墓地でありますので、こうした聖人の御墓所としては何彼と不都合であります。そこで特定の地にこれを移し、その機会に廟堂の建立となったものと思われま

この廟堂を造りますについて、これを発願したのは誰であるか、と申しますと、別に文献があるわけではありま

せんが、覚信尼公は聖人の子であり、その屋敷内に造立したのでから、発願者として第一に尼公が想定されましよう。それについて考えてみますと、尼公は晩年の聖人の側近に仕え、身辺の雑事をお世話申し上げたものと思われませんが、さらに、聖人の御往生の際には、御臨終に侍り、また葬送のことなど、万端をとり計ったのが尼公であらう、と考えられます。そういうことが、聖人の廟堂の造営を発願します大きな因縁となっている、と思われるのであります。しかも、そればかりでなく、御承知のように、覚信尼公が越後の母公恵信尼に対して、御葬儀の諸事が終った翌日の十二月一日、聖人の御往生のことを通知しましたところ、やがて越後からその返事が参っています。

それには、恵信尼公の感慨が述べられてありますが、中に聖人の思い出として三つの事実が記しています。夫の訃報を得て、恐らく五十年の同棲中の思い出が多く胸中に思い浮んだことでありましようが、吉水入室の経緯と三部経読誦の問題、ならびに下妻の夢想等、三個の事実をえらびまして、聖人の面影を浮き彫りにし、娘の覚信尼公にそれを伝えたのであります。ここに恵信尼公の人柄と叡智とが偲ばれますが、またこれをよく書く能筆家に書かしめて後に伝えるよう、その娘にさとされています。これをうけとった覚信尼公は、いまはなき聖人について感慨を深くしたことでしょうが、その聖容を顕彰し、聖人の遺跡とみ教とを長く伝えよう、と思い定めたにちがいない、と思われまます。廟堂の建立には、こうした覚信尼公の父を憶う懇会とその教を伝えようという大いなる精神があったことと想像されます。そして廟堂ということについて、一つのヒントとなったのは、恐らく先程もお話が出たことか、と思いますが、法然上人の廟堂がやはり大谷に、覚信尼公の住む近在に造営されていた、ということでありましよう。

ところで、いよいよ廟堂の造営ということになりますと、これに協力する人々が可なりいたことでしょう。聖人が関東から帰京して後、または御往生の後の御正忌等には、関東のお弟子達がしばしば上京参詣したことは、いろ

いろの史料で想定されます。それで門弟の協力がまず想像されますが、門弟中の誰か、ということになりますと、それを指摘することはちよつとむづかしい問題であります。協力者として次に考えられるのは、覚信尼公の夫であります小野宮禪念でしょう。廟堂を建てたのは禪念夫妻が住んでいた敷地内ですし、禪念の所有地ですから、彼の理解や協力がなければ到底実現されません。しかも禪念が没前文永十二年に、この敷地を妻の覚信尼に譲っていますが、その譲状によりますと、将来尼公がこれを禪念の実子唯善に譲るか、あるいは尼公の先夫の子覚恵に譲るかは尼公に一任しています。それは、この敷地内に聖人の廟堂が建っていることを深く配慮したからで、妻の立場をよく理解していたためであろうと思われる。第三に、尼公を助けたと思われるのは覚恵でしょう。覚恵は御承知の通り、覚信尼公と先夫日野広綱との間に生れた子で、後の尼公に次いで第二代の留守職に就いた人です。この覚恵の誕生の年時については諸説がありますが、わたくしは廟堂建立の文永九年の頃には、彼はすでに二十七・八歳内外の年輩であつたろう、と思つています。元来、覚恵は幼少で青蓮院に入り、かなり長くいたようですが、その後遁世して、聖人の舎弟尋有僧都から付属された三条富小路の善法坊に住したようであります。覚恵の子覚如上人は文永七年に三条富小路で生れたことは上人の伝記にみえています。それは当時覚恵が善法坊に住していたからでしょうが、彼はその後間もなく大谷に帰つたようで、覚如上人は五歳の時から、尼公の敷地つづきの隣に住んでいた慈信房澄海について学問をしています。上人五歳の時は文永十一年で、廟堂創立から二年後ですが、上人三歳文永九年の秋に母堂が逝去していますので、この頃から覚恵父子は大谷の尼公の許に帰つたのかも知れません。したがって早くから尼公と交渉も深く、覚恵が廟堂建立の議に加つて尼公を助けたものか、と想像されます。そういう点から申しますと、これは後のことですが、覚信尼公が第二代の留守職を覚恵に譲つたのもっともで、後嗣について覚恵と唯善の中、いずれとするか、ということは、案外早くから尼公の心は定っていたのかも知れません。

さてそうした協力を得まして、尼公の敷地内に廟堂を造ったので、『伝絵』には御承知のように、鳥辺野の北の墳墓をあらためて、同じき麓よりなお西吉水の北辺に遺骨を掘り渡して仏閣を建て影像を安んず、とみえています。この時御遺骨ばかりでなく、石塔をも移したことは勿論で、そこに廟堂を建てたわけであります。大体、墳墓や廟堂を造ることは、浄土教の伝統としましては、源信和尚あたりに源流するかと思われます。源信和尚の『二十五三昧起請』には、勝地を選んで安養廟と名づけ、率都婆一基をたてて結衆の墓所となすことがみえていますし、またその『起請八箇条』には、結衆の墓所を点定して花台廟と号し、二季の彼岸に念仏を修することを定めています。浄土教関係で墓や廟というものの文献としてはこれ等が古いものだと思います。もっとも、ここに安養廟とか花台廟とありますが、墳墓の外に果して堂舎があったか、どうか、問題でもありません。しかし何分廟というのですから、廟堂としての建物がいずれあるべきでしょう。しかも大体この頃から法華信仰の方でも墓所に堂を造ることが初まっています。それは、墓所としてのいわゆる法華堂です。墓所としての法華堂は、藤原道長が山城木幡の墓所に浄妙寺を建てて普賢菩薩を安置し、法華三昧を修して祖先の冥福を祈ったので、これを法華堂と称したのが初まりだ、と一般にいわれていますが、その後貴族社会では墓所に法華堂を造ることがしばしば行われています。そこで、いま申しましたような伝統のある浄土信仰でも、廟堂を造ったことと思われます。その近い例は法然上人の場合で、『明月記』の嘉禄の法難を記した中には、この堂を「墓堂」と申していますし、『拾遺古徳伝』には叡山の僧徒がこの堂をこわしている絵を書いています。

次に、聖人の廟堂の形ですが、これはよく六角の堂であったと申されています。しかし六角の堂と書いた文献があるわけではありません。しかも、六角の廟堂というものは余り例がないようであります。この種の堂としましては、むしろ八角の、いわゆる八角円堂の方が普通でないか、と思われまします。その古い例としては、藤原仲麻

呂が父の武智麻呂夫妻のために建てました大和栄山寺の八角円堂でありましようが、鎌倉時代では、京都近在で申しますと、太秦広隆寺の聖徳太子の像を安置した桂宮院で、これも八角であります。ところが、この桂宮院でも、真正面から眺めてみますと、三面だけしかみえません。『伝絵』の廟堂の図には、よく真正面から三面だけ描いているのがありますが、右のようなわけで、これだけでは必ずしも六角と断定できないと思います。そこで、六角か八角かは、結局屋根の描かれたものによる外はありませんが、そうした書き方をした甲斐等々力万福寺の六幅絵伝等によりますと、やはり六角のようであります。そういったしますと、聖人の廟堂は古来いわれます通りやはり六角の堂であったと見なければなりません。しかしそうした廟堂の例は、いま申しました通りあまりないのですが、ただ『続往生伝』に、鎮西の沙門である弘明という人が六角堂を造ったことを書いています。この人は博多の人で、書写山の性空上人の教をうけ、太宰府に住んでいまして、博多の橋を架けたり、六角堂を造ったということでもあります。もっとも、これが廟堂か普通の堂か、決定できませんが、六角の堂の一例であります。しかしそうした点になりますと、京都には著名な六角堂頂法寺もあります。これは聖人とも因縁の深いことは勿論で、古来六角の堂であったようであります。大谷の廟堂がこれに拠ったとしますと問題はありますが、右申したような次第で、こうした点にはなお問題が残っているともいえましよう。ただ六角の堂について、建築の方面の話を聞きますと、六角は八角の堂よりも造りにくいということですが、六角にいたしますと、八角より間口が広くなり、一般に外からこれを拝むという場合には、間口が広くて八角よりも都合がよい、ということでもあります。六角といたしました理由は、あるいはこういう点にあったかも知れませんが、大谷廟堂の図には、廟堂を中にして、その左右の廻廊のような建物に門弟が集っています。廟堂は小さかったので、堂内で仏事は行われず、外側で礼拝読経されたのでしようから、廟堂の間口が広い方が内部も窺われてよい、と思われまう。六角の堂とした理由の一つには、こうした

点があったかと考えられます。何分覚信尼という方は用意周到な人であったことが、その事蹟のいろいろの点から考えられますので、右のような点にも注意したのかもしれない。

この廟堂の内に最初に安置したのは何であるか、と申しますと、聖人の御遺骨と石塔であります。西本願寺の『善信聖人絵』の大谷廟堂のところをみますと、その堂の真中に石柱をたて、南無阿弥陀仏の六字名号が書いてあります。こういう名号が果して書かれていたか、どうか、問題であろうと思いますが、ともかく堂の中央に石柱をたててあります。これが茶毘して後に造った石塔で、この堂ができるとこれに移してきたものであります。そして聖人の御遺骨は、この石塔の下か、あるいは少し前方の床の下に安置したものだと思われまゝ。現在の大谷の模様は存じませんが、他の寺院の開山堂、たとえば花園の妙心寺の開山堂には、開山関国師の大きなお木像を安置していますが、その前の畳一枚余り程の板間は誰も歩かないことになっています。それは開山の御遺骨をその床の下に安置しているからだ、ということ聞いたことがあります。恐らく大谷でも中央に石塔をたて、その下か、少し前方の下に御遺骨を安置したことになると思います。この後慶長八年知恩院の拡張に当り、幕命によって大谷が東山五条坂に移りましたが、当時はいわゆる北谷墓地にありましたので、万治三年聖人の四百回大遠忌に際し、良如上人が現在の地に再び移されました。その時、甕に入った御遺骨を掘り起し、一般門徒にも拝礼せしめられたことが記録に残っていますので、その後現在のように明著堂の後に安置されたのであります。

ところで、『伝絵』で申しますと、文永九年冬の頃遺骨を掘り渡して、仏閣をたて影像を安ず、ということになっています。すなわち廟堂建立と同時に御影像を安置したというわけです。しかしいま申しましたように、『善信聖人絵』にはお木像は安置していません。そこで最初は御遺骨と石塔だけであったと思われる。これは、覚信尼公の大谷敷地寄進状をみましても、廟堂ということがありますが、影堂ということばが出て来ない、ということと

対照して、すでに注意されていることで、わたくしもその通りだと想像いたしています。もっとも、それでは『伝絵』に「影像を安ず」とあるのをいかに解すべきか、と申しますと、それは御正忌など仏事の際は画像の御影をでも安置したことをいったものだろう、と思います。そういうわけだといえますと、次に、それでは御木像はいつ安置したのか、という問題が出てきます。それについては、高田派本山の『伝絵』を見ますと、廟堂の内に石塔を中央に立て、その側にお木像を安置しています。すなわち最初に石塔がたてられ、後にお木像を安置されたものと想定されます。この『伝絵』は初稿から五十日許り後の永仁三年十二月に写されたものようですから、この頃お木像が安置されていたことはたしかであります。大体、永仁三年という年は故聖人の三十三回忌の翌年ですが、この前年すなわち三十三回忌に当る永仁二年には、覚如上人が『報恩講式』を書いていられます。これは聖人の御遺徳を顕彰したのですが、こういう講式を作ったのは、大谷における聖人の御仏事を整備したことを意味するものでありましょう。それと同じ精神から、この機会に廟堂にお木像が安置されたものと思われれます。そしてその縁起として作られたのが『親鸞伝絵』であると考えられます。御承知のように『伝絵』は聖人の御誕生から初って御生涯をあらわされたのですが、最後は大谷廟堂の成立で終わっています。このことを考えてみますと、『伝絵』は広く一般に聖人の御生涯を伝えようとしたものでありましょうが、もう少し尅実して申しますならば、大谷廟堂安置の聖人、いま大谷に安置しまつた聖人の御真影の縁起として作られたものと思われるのであります。

かようにいたしましたして、当初は廟堂内に石塔と影像とがならび安置されたのであります。この模様は先に申しました高田本山の『伝絵』によく描かれています。また建武の裏書のある山南光照寺の一幅絵伝や等々力万福寺の六幅絵伝にも、その名残がとどめられています。ところで、この後大谷には唯善の擾乱事件が起りましたが、最後には、唯善は石塔や影像、それから御遺骨等を奪いとりましたことは、周知の通りであります。そこで、門弟等は

協力して再び御真影を造り、残れる御遺骨を拾って安置して、大谷を復興しましたので、その間の事情は本願寺文書の青蓮院の下知状に詳しくみえています。それによりますと、当初のお木像を造立安置しましたのが高田の顯智上人等であったようであります。そこでも申しました通り同本山の『伝絵』に真影安置の廟堂の図が描かれていますのも、また由縁のあることだと思われるのであります。唯善は廟堂の金具を奪ったりして堂舎も破損しましたので、その後これも修覆しましたが、石塔は再び造られなかったようで、爾後御真影だけが安置されたのであります。それから、この時、廟堂の外に庵室、これは留守職の住坊でしょうが、それもできましたようで、やがて大谷が寺号公称へと推移してゆくのでありますが、当時はなお最初の六角の廟堂であったと思われます。しかしこの後建武元年にいたり、足利氏が入京した際の戦火で、大谷も類焼いたしました。ところが、その復興に当り、他所の旧堂舎を購入して移建しました。したがってこれからは六角の当初の廟堂の形はなくなり、普通一般の形の堂舎となったものと思われれます。大谷廟堂や覚信尼公のことについては、なお外にも問題がありましようが、時間の都合で、以上でもってわたくしの話を終りたいします。